

待兼山俳句会

第六百九十三回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡翠・根来眞知子
東中乱・向井邦夫・森茉衣

令和六年十月二十一日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡翠・東中乱
東野太美子・向井邦夫・森茉衣・山川マコ・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

以上出席者十三名＋投句者七名 計二十名

兼題

秋の日・稔り田（幹三） 柿・茱萸（暁子） 当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和六年十一月十八日（第三月曜日） 会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時
兼題 冬日和・八手の花（幹三） 初時雨・木の葉髪（暁子） その他当季雑詠

選者吟

木の洞へしづかに秋の日の入る 幹三

白昼に父の柿盗る鴉あり

稔り田に風の後追ふ風のあり

秋の日を映し運河の動かざる 暁子

すべきことし終へし秋のひと日かな

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

幹三 選

秋の田の光るひととき峡の村

秋入日比叡優しき湖の国

甘柿を鳥より守る赤き網

どこまでも青空柿の朱のひかる

遠き日や赤き祖母の手茱萸の酒

勢ひも色もやさしい秋の雲

鋤をおき秋の入日をじつと見る

健在と文したたむる夜長かな

◎すべきことし終へし秋のひと日かな

◎落柿舎に一句残して柿の秋

裏口の窓に小鳥のシルエット

坂降りて秋の入日に足とめる

斜めなる秋日鏡へタ化粧

稔り田の河内平野の穂波かな

柿の木にカラス忍者のごとき影

稔り田や通学の子のヘルメット

病む人の声耳にあり柿なます

◎秋の日を映し運河の動かざる

秋の日のすんと落ちて山浮かぶ

兵十郎

兵十郎

邦夫

輝子

恵子

茉衣

邦夫

遊子

暁子

乱

茉衣

茉衣

暁子

盛雄

盛雄

兵十郎

恵子

暁子

安廣

◎街わかく街路樹若く初紅葉

必死とはこの秋の蚊の小さきにも

コスモスの丘見ゆ能勢の山歩き

◎ざくざくと稲刈る腕や日の匂ひ

◎茱萸熟るる下校のチャイム鳴つてをり

秋の日や庭の真上を航空機

◎六甲の枝道ゆけば茱萸赤し

茱萸の実の熟れて摘みたし紅さかな

真つすぐに稔り田分くる鉄路かな

鈴なりの茱萸の一枝竹筒に

太美子

太美子

マコ

安廣

輝子

邦夫

瑛三

堯子

安廣

眞知子

幹三 特選句講評

・すべきことし終へし秋のひと日かな

暁子

心地よい達成感です。日の影の薄く、からつとした一日の納得できる「終」。

・落柿舎に一句残して柿の秋

乱

秋らしい一日の日記です。落柿舎近辺の秋の景が浮かびます。「残して」と「柿の秋」の呼応が心地いいですね。

・秋の日を映し運河の動かざる

暁子

一句目は「秋の一日」。この句は「秋の太陽」です。とろ

りとした水面に反射する日の光が秋という季節の到来を思
わせます

・街わかく街路樹若く初紅葉

太美子

住む人も家も道も公園もみんな新しい住宅地。そこに植え
られた街路樹もまた若い。そんな街に秋の気配です。気持ち
のいい句。

・ざくざくと稲刈る腕や日の匂ひ

安廣

聴覚・感触から嗅覚へ。「や」で切って「日の匂ひ」への
転換が見事です。やはり俳句は「切れ」だと学ばせていただ
いた一句。読者それぞれに自分の秋を思い起こさせます。

・茱萸熟るる下校のチャイム鳴つてをり

輝子

「全て言い得て何やある」とは芭蕉のことば。この句の省
略と切れは見事です。読者に鑑賞できる十分な余白がとって
あります。

・六甲の枝道ゆけば茱萸赤し

瑛三

秋の色に移っていく林の中、ぽっと赤い茱萸に気がつく…
作者と共にゆつくりと山歩きを楽しんでいる気分になりました。

暁子 選

稔り田に風の後追ふ風のあり

幹三

子ら去りて残りし茱萸の種の嵩

翠

◎稔り田を見やり社に手を合はす

邦夫

稔り田の河内平野の穂波かな

盛雄

稔り田の近江富士までつづきをり

幹三

ざくざくと稲刈る腕や日の匂ひ

安廣

街わかく街路樹若く初紅葉

太美子

秋の日やホーム乗り換へかけ足で

恵子

六甲の枝道ゆけば茱萸赤し

瑛三

稔り田の黄金波打つ湖国かな

瑛三

丸丸と肥えし野良猫墓地の秋

安廣

必死とはこの秋の蚊の小さきにも

太美子

秋入日比叡優しき湖の国

兵十郎

◎鋤をおき秋の入日をじつと見る

邦夫

菱の実の茹でて真白き実の甘き

かな子

真つすぐに稔り田分くる鉄路かな

安廣

秋の日を今日のひと日と舞ふ黄蝶

和江

◎秋日濃し最後の一周大声援

堯子

◎秋の日に格子の影や猿の檻

幹三

柿食ぶる速さに負けじ皮を剥く

堯子

稔り田の明日の刈り入れ待つ日暮

眞知子

白昼に父の柿盗る鴉あり

幹三

枝先のより濃紫式部の実

兵十郎

秋の日や献血願ふ声かれて

翠

暁子 特選句講評

・稔り田を見やり社に手を合はす

邦夫

・鍬をおき秋の入日をじつと見る

邦夫

この二句は偶々同じ作者であった。お仕事の合間に畑仕事を
してこられたとお聞きしている。自ずと収穫を神や自然に
感謝する気持ちが湧き上がるのだ。静かな句、ミレーの絵の
ようだ。

・秋日濃し最後の一周大声援

堯子

身近な運動会だろうか、大きなマラソン大会だろうか。「秋
の日」という季題には「秋の一日」と「秋の太陽、日ざし」
との両方の意味がある。ここでは秋の強い日差しをいう。秋
日は昼は日差しが強くても、つるべ落として夕暮れは早い。
日差しがある短い時間に人は様々なドラマを繰り広げ、行く
秋を惜しむ。

・秋の日に格子の影や猿の檻

幹三

この句の場合も季題は秋の日差しを指している。勿論日差
しは強いであろうが、夏のそれではない。何となく哀愁を
帯びた、もの悲しい感じをこの句から受けた。格子、影、檻
があるからだろう。ボスを中心に日の当たる高いところに群
れかたまっているのだろう。檻の中には格子の影が長く延び
ている。やがて冬が来る。

句会後の話し合いの中で、「柿食ぶる速さに負けじと皮を
剥く」という句について、作者堯子さんは「負けじ」のとこ
ろを間違って「負けじと」と書いたといわれた。私は選句の
時、清記を見て、中人になるから「負けず」にしてはどうか
と提案していた。しかし堯子さんの原句の「負けじ」の方が
よい。助動詞「じ」は、話し手の意志、決意を表す助動詞「む」
の否定形であるから、「食べる速さに負けるものか」という
勢いで柿を剥くという意味。私にも何度とその経験がある。
特に何人にも柿を剥いてあげる場合、負けるものかという気
持ちになる。そんな時「負けず」より「負けじ」の方がよい。

互選三句

朱美 選

秋入日比叡優しき湖の国

兵十郎

丸丸と肥へし野良猫墓地の秋

安廣

池面ゆく川鶉の番秋日和

茉衣

楽し気な鶉と水面のきらめき、平和な光景が目には浮かぶ。

瑛三 選

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

暁子

秋の日を映し運河の動かざる

暁子

鍬をおき秋の入日をじつと見る

邦夫

ミレーの絵を見ているような句。

和江 選

茱萸赤し約束したる帰り道

輝子

白昼に父の柿盗る鴉あり

幹三

ただひとつ残る稔り田雲白し

輝子

刈り残された田へ何故か郷愁が沸く。

かな子 選

秋の日やあれこれ洗ひ今日は主婦

恵子

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

暁子

稔り田や通学の子のヘルメット

兵十郎

故郷は河内平野の真中、穂波の中を通学。郷愁を誘う句。

邦夫 選

茱萸熟れて故郷の人ら変らざる

暁子

門扉閉め秋日しみじみ慈しむ

茉衣

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

暁子

茱萸は年配の方には懐かしい果。「思ひ出の滴」が秀逸。

恵子 選

稔り田に風の後追ふ風のあり

幹三

柿熟れて開かぬ雨戸や主如何に

乱

秋の日を今日のひと日と舞う黄蝶

和江

秋の短い日を大切に思う蝶の気持ちに打たれました。

堯子 選

落柿舎に一句残して柿の秋

乱

ざくざくと稲刈る腕や日の匂ひ

安廣

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

暁子

茱萸の実の滴のような形を思い出にもかけた美しい句。

太美子 選

来し方と行く末行き来する秋思

乱

晚白柚生まれくる子の大成を

和江

稔り田に風の後追ふ風のあり

幹三

対象と向き合う作者の真剣な眼を感じます。

輝子 選

秋日濃し最後の一周大声援

堯子

稔り田の暮れて米の香ありにけり

幹三

遠き日や赤き祖母の手茱萸の酒

恵子

思い出す材料は違っても、幼い日の懐かしさは同じ。

兵十郎 選

木の洞へしづかに秋の日の入る

幹三

どこまでも青空柿の朱のひかる

輝子

秋の日のすとんと落ちて山浮かぶ

安廣

秋の日暮は早く、将にすとんと落ちる。山浮かぶがよい。

茱衣 選

秋の日を映し運河の動かざる

暁子

秋の空信者集まる鐘の音

マコ

散歩道両手いつぱいグミを摘む

朱美

散歩中に出会ったグミの木のたわわな赤い実摘まずには。

マコ 選

夕日より熟柿を外し籠に盛る

邦夫

鈴なりの茱萸の一枝竹筒に

眞知子

採る人も無きまま秋の茱萸たわわ

安廣

私がうまく作れなかった茱萸を上手に表現できている。

眞知子 選

すべきことし終へし秋のひと日かな

暁子

秋の日を今日のひと日と舞う黄蝶

和江

鎌をおき秋の入日をじつとみる

邦夫

どの句もコアな秋がすとんと胸に落ちました。

翠 選

必死とはこの秋の蚊の小さきにも

太美子

遠き日や赤き祖母の手茱萸の酒

恵子

病む人の声耳にあり柿膾

恵子

柿膾を作るたびにあの日のあの人のことを思い出す。

盛雄 選

採る人も無きまま秋の茱萸たわわ

安廣

秋日落ち闇わだかまる庭の隅

安廣

みささぎに柿たわわなる明日香かな

遊子

古代の明日香の秋を描いて佳品と感じました。

安廣 選

必死とはこの秋の蚊の小さきにも

太美子

思ひ出の滴のごとく茱萸つまむ

暁子

稔り田に風の後追ふ風のあり

幹三

風に吹かれて幾重にも波打つ稔り田を活写された。

遊子 選

秋日揺れ水玉模様濃く淡く

堯子

秋の日の大き落日海に果つ

瑛三

伸び縮み影の舞ひ舞ふ秋祭り

安廣

踊る人ではなくその影に着眼した措辞で動きがよく伝わる。

乱 選

秋の日を映し運河の動かざる

暁子

遠き日や赤き祖母の手茱萸の酒

恵子

街わかく街路樹若く初紅葉

太美子

若い街と街路樹の紅葉を詠って、人のことも暗示。

参加者自選句

散歩道両手いっぱいグミを摘む

朱美

秋の日の大き落日海に果つ

瑛三

晚白柚生まれくる子の大成を

和江

茱萸食めばしいちゃんといふ子を思ひ出す

かな子

稔り田を見やり社に手を合はす

邦夫

遠き日や赤き祖母の手茱萸の酒

恵子

秋日揺れ水玉模様濃く淡く

堯子

庭柿の不作を願ふ不届者

太美子

どこまでも青空柿の朱のひかる

輝子

みちのくの樽抜き柿や句碑ひとつ

兵十郎

茅葺の屋根でたわわの柿の赤

茉衣

街中の狭き稔り田頑張って

マコ

刈り入れを待つ稔り田や穂の重し

眞知子

秋の日や献血願ふ声かれて

翠

干上がりし田に傷心の農夫佇つ

盛雄

秋の日のすんと落ちて山浮かぶ

安廣

雁行のやがて沼地に着水す

遊子

来し方と行く末行き来する秋思

乱

即吟

やっと秋が来たと感じられる秋らしい一日、卓には烏瓜と紫式部が飾られた。長い間、安廣さんにお世話いただいたが、今回は選手交代で太美子さん。烏瓜は道の駅で見かけて、買ってきていただいたとか。

ご厚意を感謝し、しつかり俳句を詠んだ。

辛うじて蔓に縋れる烏瓜

暁子

葉は捨てて実を慈しむ烏瓜

邦夫

おままごとむらさきしきぶ皿に入れ

恵子

烏瓜赤き実何故に名付けらる

堯子

優美なる花遠くして烏瓜

太美子

烏瓜熟れて朱色の極まれる

輝子

いつの間に蔓を伸して烏瓜

兵十郎

柿の実と色競ひ合う烏瓜

茉衣

手折られし紫式部さびしげに

マコ

烏瓜赤黒く熟れ喪の知らせ

幹三

赤緑踊りだしさう烏瓜

翠

青と赤並び垂れをり烏瓜

安廣

烏瓜萎みて小さく乾きをり

乱

ひとこと

山田安廣

鶴岡言成様への弔句集の編纂につきまして皆様方にはご協力本当に有難うございました。兵十郎さんのご尽力により立派な弔句集が完成し、無事ご遺族にお届けする事が出来ました。

今回は見学者として兵十郎さんのご友人の山川正彦氏がご出席下さり出句・選句にもご参加頂きました。俳号は「マコ」さんです。引き続き会員としてご参加頂く事を期待致しております。正式にご参加が決まりましたら、ご諒解を得られる範囲で、略歴など情報を開示させて頂きたいと思っております。

フリートーキングでは幹三さんから「涼しい」「楽しい」等の形容詞をそのまま使う事は好ましくない。「形容詞を使わずに、その感じを表現し伝えるのが俳句である」とのご指摘がありました。